



MAキック
マッハ士道館3 四大タイトルマッチ
1月24日●東京・後楽園ホール

井上も果敢に得意のヒジ打ちを狙ったが、決定打を打つまでには至らなかった。ふたりとも前には出ているが、何かが噛み合わない。達成感のない王座防衛。新春第一戦のメインを張る者にとって、これほど辛いものはない。いったい何が悪かったのか？

その理由を「佐藤はいつも硬いから」と分析したのは、士道館の添野義三館長だ。「まだ力を抜くところを入れるところがわかっていないんだよねえ。」

格闘技というものは難しいもので、常に100%の力を出し続けなければならない。結果を残せるものではない。その合間に力を抜く部分があれば、ガチガチの動きになってしまう。タイ人がいい例だ。普段は全身

に無駄な力を一切入れることなくフニヤクとしているが、いざ攻撃する段になると、パンチやキックがヒットするインパクトの瞬間にもっとも衝撃が加わるように程よい力を加えてくる。佐藤の動きがガチガチだったとは思わない。だが必要以上の力が加わっていたのは疑いようもない事実だ。ライト級王者としてのプレッシャーがうさせてしまったのだろうか。

添野館長をして「アイツは怖い顔をしているけど、根は本当に真面目な奴」と太鼓判を押すほど、佐藤の外見と内面には大きなギャップがある。士道館の関係者でも佐藤のことを悪くいう人はいない。それほど真面目に練習に打ち込むタイプであるからだ。

だからこそ佐藤は今回の不完全

燃焼の責任をすべて自分で背負い込んでしまった。しかも昨年11月の村浜武洋戦に続く悔いの残る試合。控室へ戻ると、「自分なりに頑張ったつもりなんですけど、こういう試合が続いてしまうと、もう無理かなという気持ちになってしまいますね」とうなだれた。「また頑張らなければならぬんだらうけど、どうも結果が出ない。誤算？いやこれが自分の実力ですね」

それでも井上のヒジ対策は万全だったのでは、と筆者が尋ねると、佐藤は「いや、(くると)わかってるものももらっているようじゃ、本当にどうしようもないですよ。ヒジはもらわれないのが当たり前。(今日の自分は)それ以前の問題ですよ」

佐藤が続ける。

「こういう試合が続くと、これまでも多少なりとも培われてきた自信が崩れてしまう。納得のいかない練習が続いたとか、そういうのだたらわかりますけど、今回は練習も積んだし、体重もベストのライト級。(士道館の)ほかのみんなは、後輩のみんなは結果を出しているのに、自分だけ、先輩である自分がいちばん……」

そこまで喋ると、佐藤は号泣した。努力しているのに結果が出せない男に、かける言葉はみつからない。人間機関車の目にも涙。プレッシャーからの呪縛の処方薬にと添野館長は「外国に連れて行って、もっと修羅場をくぐらせるしかない」という計画をぶちまけた。こんなところで機関車が止まってはいけない。

(布施)



●MA日本ライト級タイトルマッチ
(第12試合IIメイン・イベント)
(同級王者)
△佐藤堅一 (士道館所属、65・9・25歳)
(5R判定ドロー) ●総成績 50:50:49:49:49:49
△井上 哲 (山本ジム所属、66・2・30歳)
(同級一位)
●佐藤が防衛に成功

●両者とも行くところは行く、しかしふたつの闘志がガツリとかみ合う攻防は生まれなかった
●右ローによる攻撃が目立った佐藤。セコンドは上下に散らしてのコンビネーション殺法を提示していたが……



●コーナーに追い詰められてのヒジはご覧の通り、グローブでカットした佐藤。「俺が下手だったのが一番の理由。それと俺がもっと根性を出さなかったのが悪い」(井上)
●井上といえば、ヒジ。そのくらいヒジで有名な選手。佐藤の防衛もうまかったが、組みつこうとするスキをうかがってヒットさせる場面も

●「俺が言うのは生意気ですけど」と前置きしながら、井上は「他の組織のライト級——小野瀬、那志、さんや佐藤(幸也)さんには、いまの俺や佐藤さんだったら大刀打ちできない(かし)。MAのライト級はもつと頑強らない」とはつばをかけた。井上は3月14日の文芸春秋にも出場する予定だ



●引き分け防衛で再びチャンピオンベルトを腰に巻いた佐藤だが、最後まで笑顔を見せることはなかった